

## 02 私たちが変わらなければ（同和問題）

5 （ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、岡澤アキラがお届けします。

今回は、ある中学校の先生のお話をお聴きください。

10 【中学教師の独白】今から8年ほど前、かつて私が勤めていた中学校の同窓会が開かれた時のことです。

久しぶりに会う教え子のA子さんから相談を受けました。付き合っている彼の両親から結婚を反対されているというのです。彼女がいわゆる同和地区出身だから、というのが理由でした。彼は、両親を説得しましたが、許してもらえませんでした。Aさんは、自分のせいで親子関係も崩れてしまうかもしれない、と悩んでいたのです。

15 そこで、同窓会に来ていた教頭先生が、彼の両親に会ってみようということになりました。教頭先生は、教務主任だった当時からAさんのこともよく知っていたため、「自分が話してみよう」と言ってくれたのです。

20 教頭先生が、部落差別の歴史や、それがいわれのない差別であることなどを根気強く話してくれたおかげで、彼の両親もようやく結婚を許してくれました。

ただし、「結婚式は内々で」ということになりました。親戚

25

などに彼女の出身地のことが知られたくなかったのです。それもあって、結婚しても数年間は、彼の両親が二人の家に来ることはありませんでした。

30

やがて、二人の間に子どもが生まれます。孫の誕生を機に、彼の両親は時々訪ねてくるようになり、孫のことを本当に可愛がってくれました。

ある日、彼の両親が「結婚のときに反対して悪かった

35

ね。」と言って、初めてA子さんに謝罪されたそうです。可愛い孫の将来を思うと、自分たちのこれまでの考えを改めなければいけないと気がついたのでしよう。無邪気に笑う孫の顔を見ながら、彼の母親は、こうつぶやきました。

「将来、この子が差別されることのない世の中になってほしい。そのためには、まずは私たちが変わらないといけないね。」

40

(ナレーター)「生まれた場所や住んでいるところで差別されるなんて、悲しいことです。教え子たちにはみんな幸せになつてほしい。」と先生は言います。